

資料－１

『第１回 手取川水系流域委員会』での意見とその対応

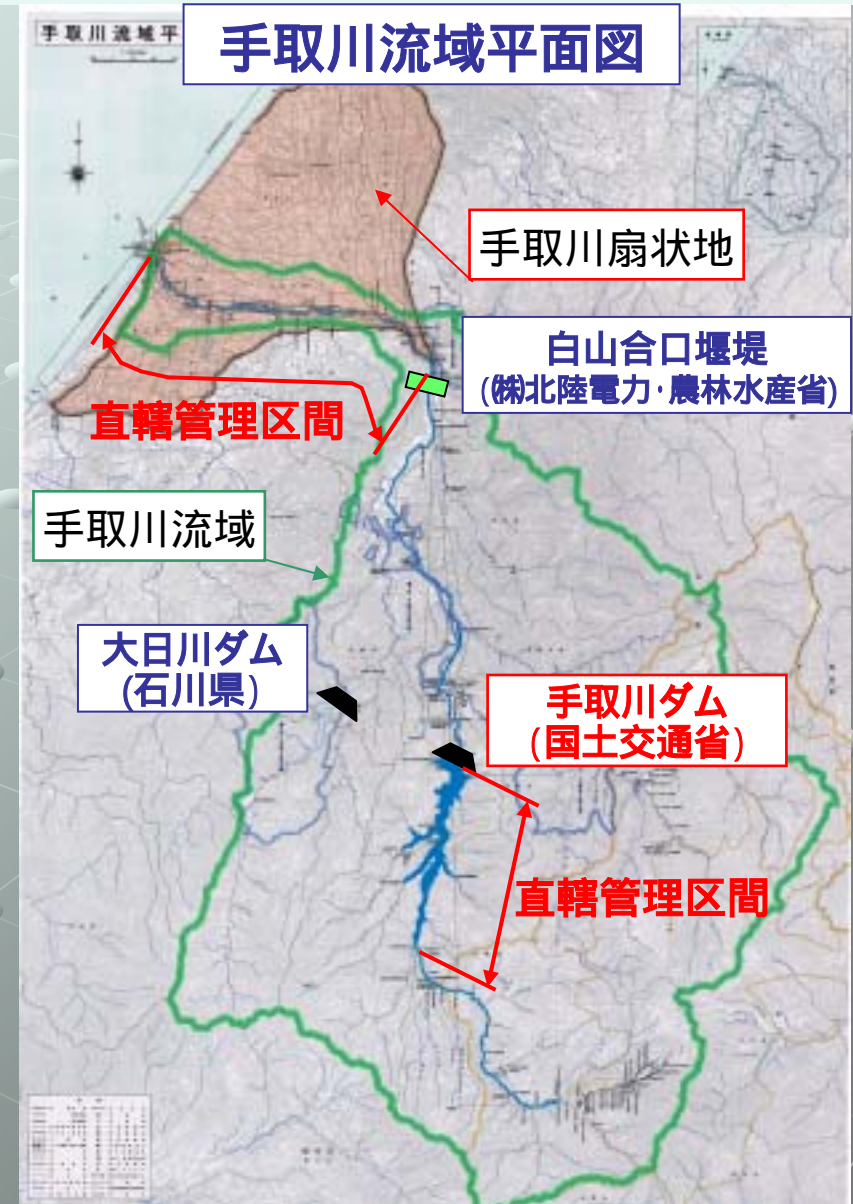
分類	意見	対応(案)
流域圏の設定について	水文学でいう流域という考えにとらわれることなく、手取川扇状地を含むさらに広い領域を見据えた流域圏という考え方で議論してほしい。	水文学的な流域という設定ではなく、地域や環境面でのつながりを考慮しながら、広域的な範囲を考えながら検討(別紙－１参照)
	環境を考える際には、流域という概念を水文学的に限定せず、川の流れている周りの地域の環境の柱として位置づけながら、考えていくべきである。	
	直轄区間のみでなく、流域全体に目を向けた計画としてほしい。	
生物について	魚は水涸れが起きては移動できないし、横断工作物等の障害物などがあっても移動ができず、魚にとって非常に棲みづらい状況である。しかし、下流部で生息するトヨは地下水の自噴する場所でないと生息できないが、その地下水の涵養をするために現状では、横断工作物等により農業用水を取水している。非常に難しい問題を抱えている。	魚類の遡上・降下や生息環境への配慮を検討 (手取川の課題: 37 ページ)
	鉄筋コンクリートの建物を造るようになってから手取川の砂はどんどんとられてしまい、石だらけになった。河原の昆虫はどんどん数が減り、中には絶滅したものもある。	手取川の前風景である石の河原の再生に向けて検討(手取川の課題: 35、36 ページ)
	その場所で一度絶滅した種を移植・復元するのは容易ではない。	
	自然環境、特に生物の評価には長期間のモニタリングが必要。	自然環境等の継続的なモニタリングを実施(河川水辺の国勢調査、多自然型川づくり追跡調査等)
	適切な評価を行うためにも、事後調査等をしっかりやらないといけない。気象・水文等の観測も大事だが、同時に生物調査も行ってもらいたい。	
	日本的に鳥類の繁殖地が減少している。また、レッドデータブックのコアジサシ、オオタカ等たくさんの野鳥が利用している。	樹林とのバランスを考えた石の河原の復元、コアジサシの繁殖地の保全を検討(手取川の課題: 35～37 ページ)

生物について	昔は河原に砂場や石原などがあり、それにより植生も非常に多様であったが、近年は単純化(下流化)してきている。	樹林とのバランスを考えた石の河原の復元を検討(手取川の課題:35,36ページ)
	日本の河川の植生の特徴をよく考えて議論していく必要がある。	河川環境の保全と活用に関する検討を進める中で検討
	川の本来の姿は水が流れているもの、水((維持流量)が流れているようにしてほしい。	河川の水量確保に向けた対策を検討(手取川の課題:23~28ページ)
	魚類にとって手取川の濁りも問題であり、なんとかしてほしい。	濁水対策を検討(手取川の課題:29~32ページ)
	稚魚の生育のためにワンドを作してほしい、魚つき林も必要。	魚類の生息環境への配慮を検討(手取川の課題:37ページ)
環境について	手取川扇状地は石川県最大の地下水の水がめである。手取川扇状地の地下水は降水・手取川の地表水・かんがい用水が涵養源であり、地表水と地下水を一体として議論していく事が重要である。	河川の水量確保に向けた対策を検討(手取川の課題:23~28ページ)
	水質は、水の中の生物のエネルギーであり栄養源であり、また、さまざまな影響を与える物質である。川の流れと水質によって様々な生態系が形成されており、水の質とは、河川の環境に非常に影響が大きいものである。	河川環境の保全と活用に関する検討を進める中で検討
	人間のみでなく、河川内の生物を考えた上で水質の目標を検討すべき。	
歴史・文化について	水質は濃度は薄いが地球上を循環しており、非常に複雑である。	
	何故、手取川がここにあるのか、成り立ちを考えながら議論していきたい。	整備計画全般に通ずる重要な視点として、今後の検討を進める中で検討
	後世の人々に川がこういう役割をしていたということを分かり易く伝えるためにも、これからは、整備と同時に歴史的な景観を残せるような配慮をして欲しい。	河川空間の利・活用に関する検討を進める中で検討
	昔の災害(大昔)の経験も活かしながら計画の検討を進めて欲しい。	治水に関する検討を進める中で検討(別紙-2参照)
	夢のある手取川・ロマンのある手取川。それを子供たちの教育の場として活かせるようにしてほしい。	河川空間の利・活用に関する検討を進める中で検討

歴史・文化について	野外学習に最適なフィールドであり、環境教育のプランも検討してほしい。	河川空間の利・活用に関する検討を進める中で検討
	川のロマン性、物語性を高めてほしい。手取川や橋に魅力的な愛称をつけてはどうか。	
	聖なる川を中心とした流域全体をテーマパークとして整備してほしい。上流・下流域では「水」を浮上させ、中流域では「火」の芸術である九谷焼を取り込み、川北町の火祭りとアンサンブルをなす。メリハリを明確に出していくと独創性にも繋がり、整備のテーマとなる。	
	手取川は自然豊かで、ダイナミックな本物志向の河川である。周辺の開発等により環境面・精神面への影響を危惧している。	河川環境の保全と活用に関する検討を進める中で検討
地域・経験について	これまでの自分の経験を生かし、議論していきたい。	—
	今後の整備計画を定める大事な会議と思う、十分な審議をお願いしたい。	—
	地元の一員として意見を述べたい。	—
	鶴来町山ノ庄(明島)地先堤防は洪水が一番最初にあたる箇所であり、危険である。	治水に関する検討を進める中で検討

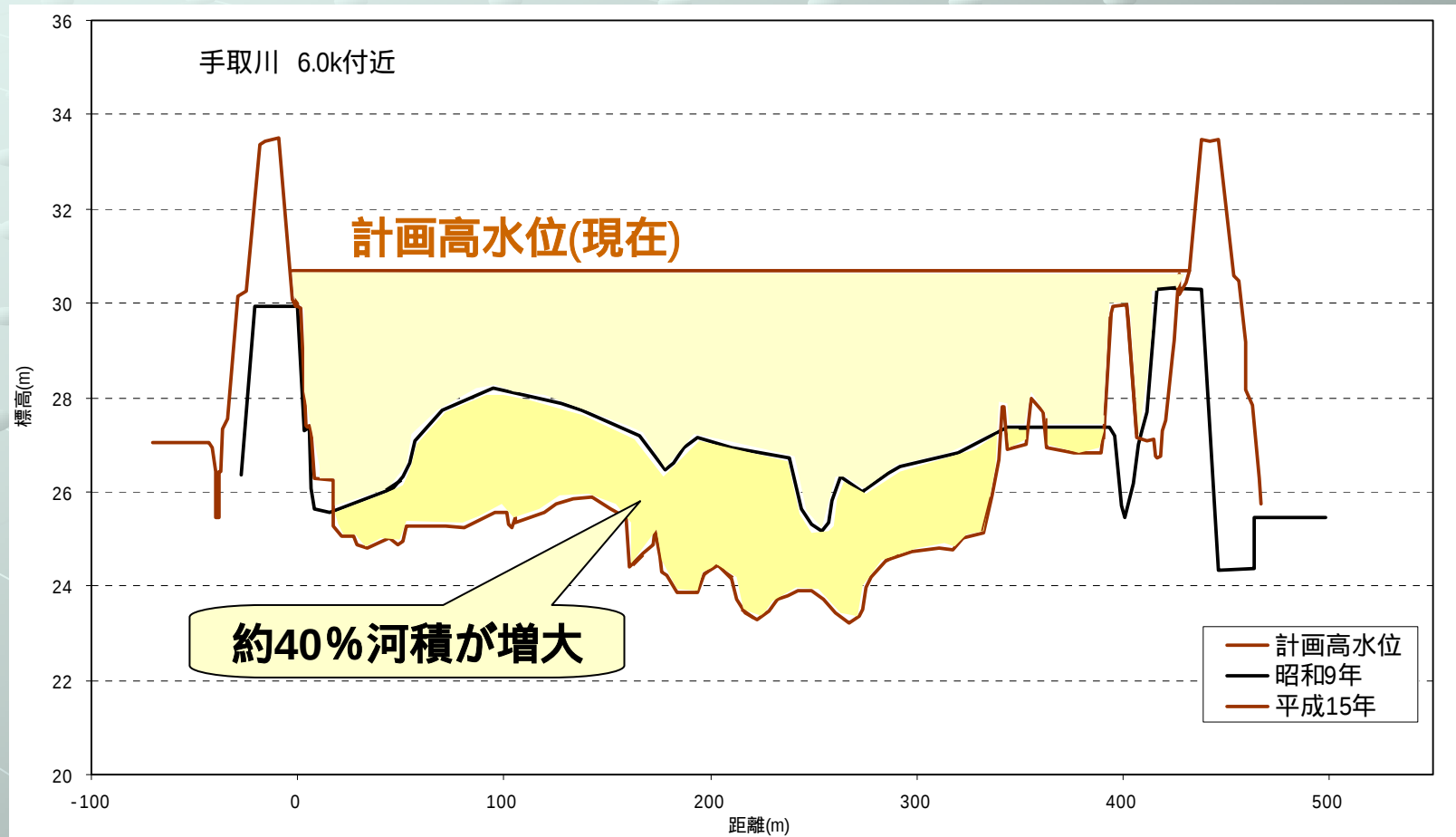
河川整備計画対象区間

直轄管理区間である河口から白山合口堰堤までの17.3kmの区間と上流の手取川ダム区間20.0kmの整備を進めることにより、流域全体の質の向上を図ります。



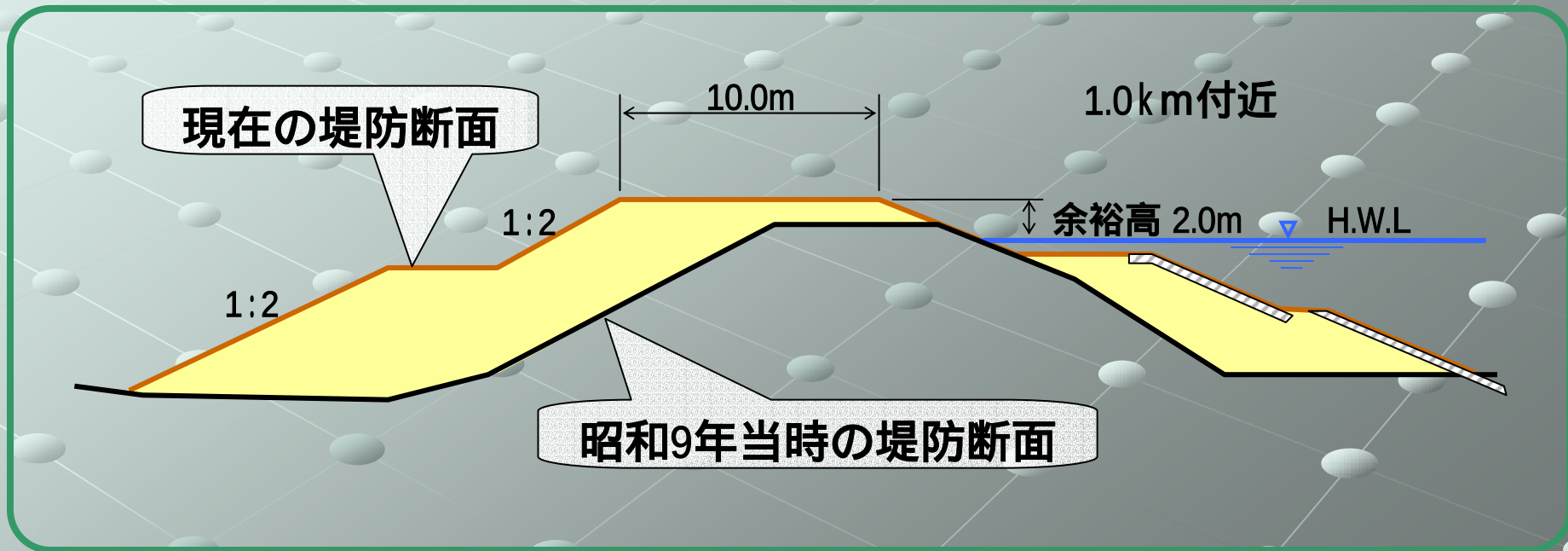
河道断面の比較

現在の手取川の河道断面積（計画高水位以下の面積）は、昭和9年当時に比べて40%増大しています。



堤防断面の比較

昭和9年7月洪水時では、 $4,080\text{m}^3/\text{s}$ と既往最大流量を記録しました。被災当時の堤防に対して現在の堤防は、高さ、幅ともに拡充されています。



計画流量配分

(1) 計画規模

100年に1回の確率で発生する降雨または洪水を対象

(2) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項

河川名	基準地点	基本高水の ピーク流量 (m^3/s)	洪水調節施設 による調節流量 (m^3/s)	河道への 配分流量 (m^3/s)
手取川	鶴来	6,000	1,000	5,000

(3) 主要な地点における計画高水流量に関する事項

■ 手取川計画高水流量図 ■

